流離譚（新潮連載

昭和五十五年十一月号第四十八回～第五十五回）

新潮流離譚第四十八回の書出しは、

西南戦役が西郷軍の敗北にをはつて、

西南戦争が終わってから前号に記載したように、正徳、大石圓は松山の牢に投獄され、正徳は獄死に近い形で死去します。死の直前道太郎が正徳を獄に訪ねていきます。流離譚には西南戦争に関連して、

『西南事変に於ける立志社動静報告』といふ政府のスパイ探問書には、『西南事変に於ける立志社動

静報告』といふ政府のスパイ探問書には、板垣に随従する者は、今般同行せし中彦太、秋沢清吉、古沢迂郎、安岡道太郎、四名のみ。

この動静報告書をインターネットで検査すると著者は松岡守信・荘村省三で明治十年発行となっている。松山の獄に行ったのはこの後で、この探索の結果を何か話したのだろうか。

この探索に絡んでか文助の系圖について次の記載がある。

「道之助、明治三年三月七日、東京へ探索のため」

出船」・・・この系図がお下の家に残ってゐたところをみれば、おそらく文助はその頃お西の家を引き払って、高知市内にへ移住したものかと思われる。

文輔がお西を引き払ったのは、四坊山に妻の墓（文輔妻）、嘉助の墓、馬子（嘉助の娘　明治三年死去）、覺之助の墓を作ってからである。嘉助と覚之助の墓には、明治三年以降に出された、太政官布告「在官之輩名称之儀是迄苗字官相署シ来候処自今官苗字実名相署シ可申事」などに違反する氏、諱などが刻まれている。これらの墓は自分達が埋葬する

覚之助の墓標

安岡覺之助平正義

氏　諱

写真奥から
文輔妻
　　嘉助　馬子
　　覚之助の墓
＊文輔妻の左、嘉助の右側、覚之助の左側は妻の墓用にスペースがある。

また、系圖、日記などは明治に入っても文輔は手元に置き、文輔死去後、嘉助嫁から公文家で保管され近年、お下でお預りしています。

第四十九回の書出しは、

政府は明治十一年、太政官令によつて、集会の場所に警官を臨席させること同十三年にはさらに政治結社や集会を届け出制として、政治結社の連絡や屋外集会などを禁止する集会条例を出した。

流離譚では言論弾圧、新聞の葬式の話が書かれて

いる。連続ドラマ「らんまん」で演説会にいた牧野が臨席した警官に捕縛される場面がありました。この太政官令に基づく場面なのだろう。

それにしても、こんな新聞の葬式など、いつたい誰が考へついたものだらう。当時の高知新聞社の主だつた顔ぶれは、次のやうになつてゐる。

給料　役職　氏名

無給　社主　深尾重行

・・

三十円　雑報雑録　坂崎紫蘭

・・・

十五円　雑報　安岡道太郎

とあり安岡道太郎は坂崎紫蘭の部下の位置にいる。

「山内家史料　幕末維新　第六編」に討幕攘夷の議論で容堂の怒りを受け、小笠原唯八が「・・・早追を以つて國許へ差返さるる旨・・・」とあります。この時安岡権馬、秋沢源九郎も高知に帰されます。この時の模様を権馬は京行雑記に書き残しています。

前述の山内家史料に「天驚海立　豪骨」からの引用としてその京都からの帰国状況が記載されていま

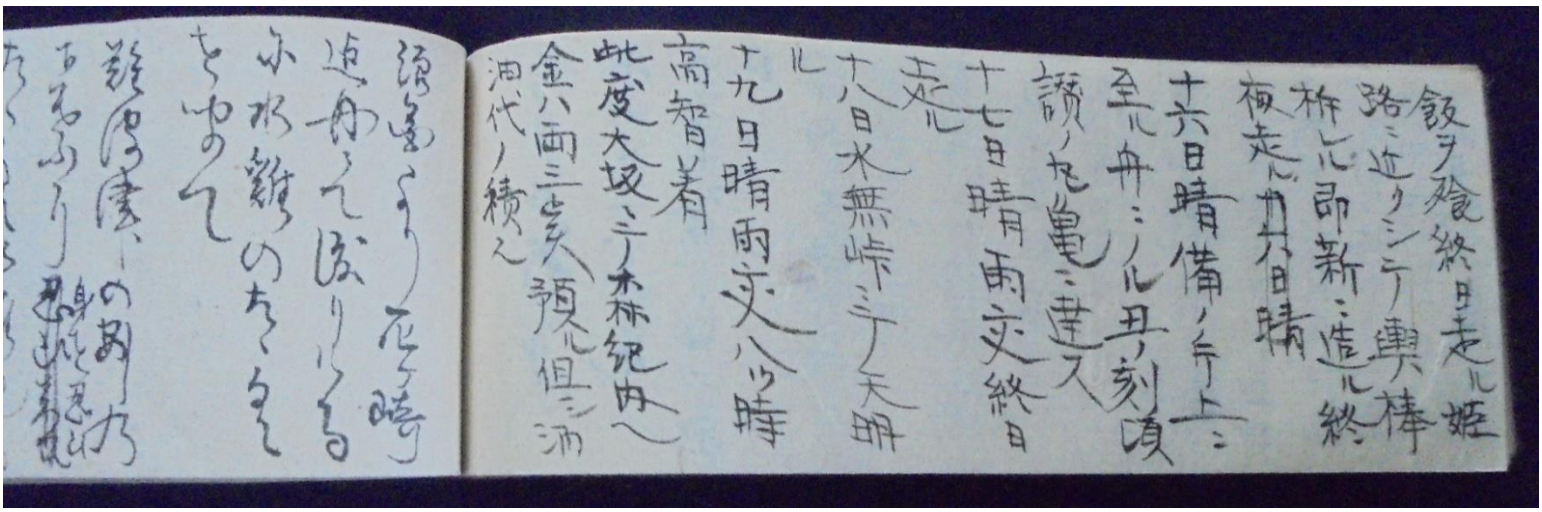
す。それは「小笠原傳」として、坂崎紫蘭が土陽新聞に明治二十六年に掲載したものです。

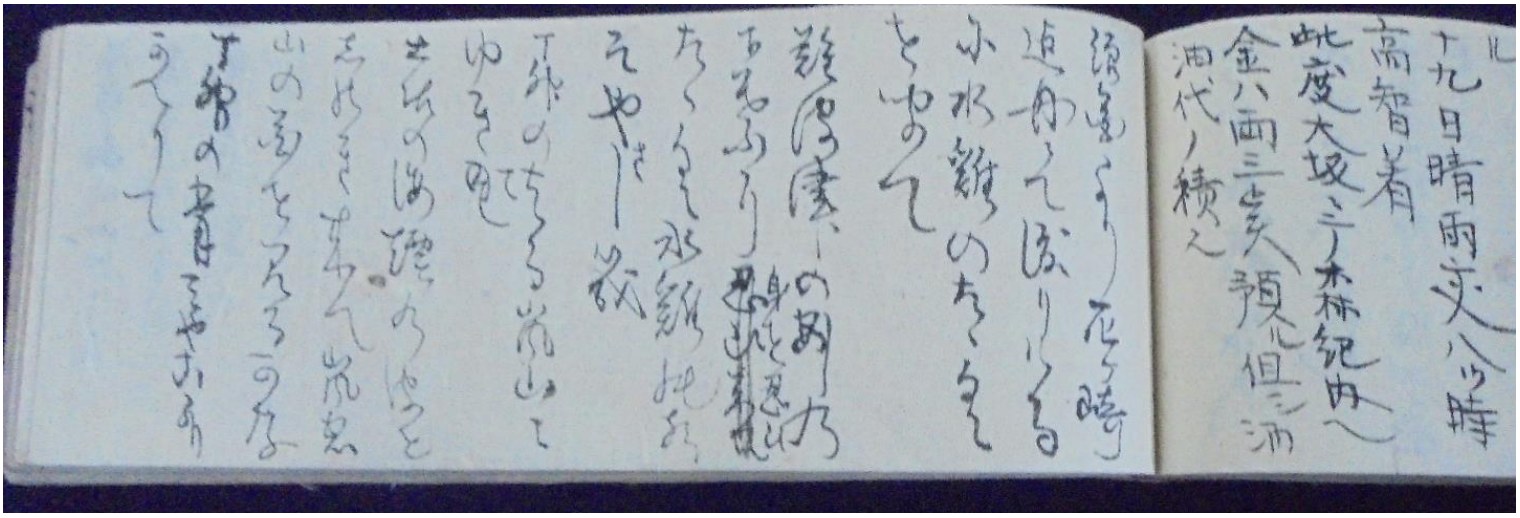
京都での生活、京都からの早追の様子、尼ヶ埼を行く場面に

難波津のあしの下葉に身忍び
たたく水鶏の姿ぞやさしき

と書かれています。これらは京行雑記に同じです。

「京行雑記」は隠されるように置かれていたので流離譚を書き始めた頃、章太郎の手元になく流離譚の参考史料になっていません。





正徳の書いた資料は明治維新の頃、お下に運び込まれていたようです。この作業は正風が手助けしたのでしょう。

この引用を次のような経緯があったと推測します。紫蘭が小笠原傳を書くに当

たって、道太郎に早追時期の資料がないか相談を受け、正徳を松山に訪ね、京行雑記のことを聞き閲覧の許可を得て、正風が出して見せ、それを道太郎が写して紫蘭に渡したのではないか。大分時間を経った明治二十六年小笠原唯八傳として新聞に発表したと推測しています。

第五十回の書出しは、

安岡雋二郎は、安政五年（一八五八）本家の覚之助の次男に生まれたが、慶応二年（一八六六）三月

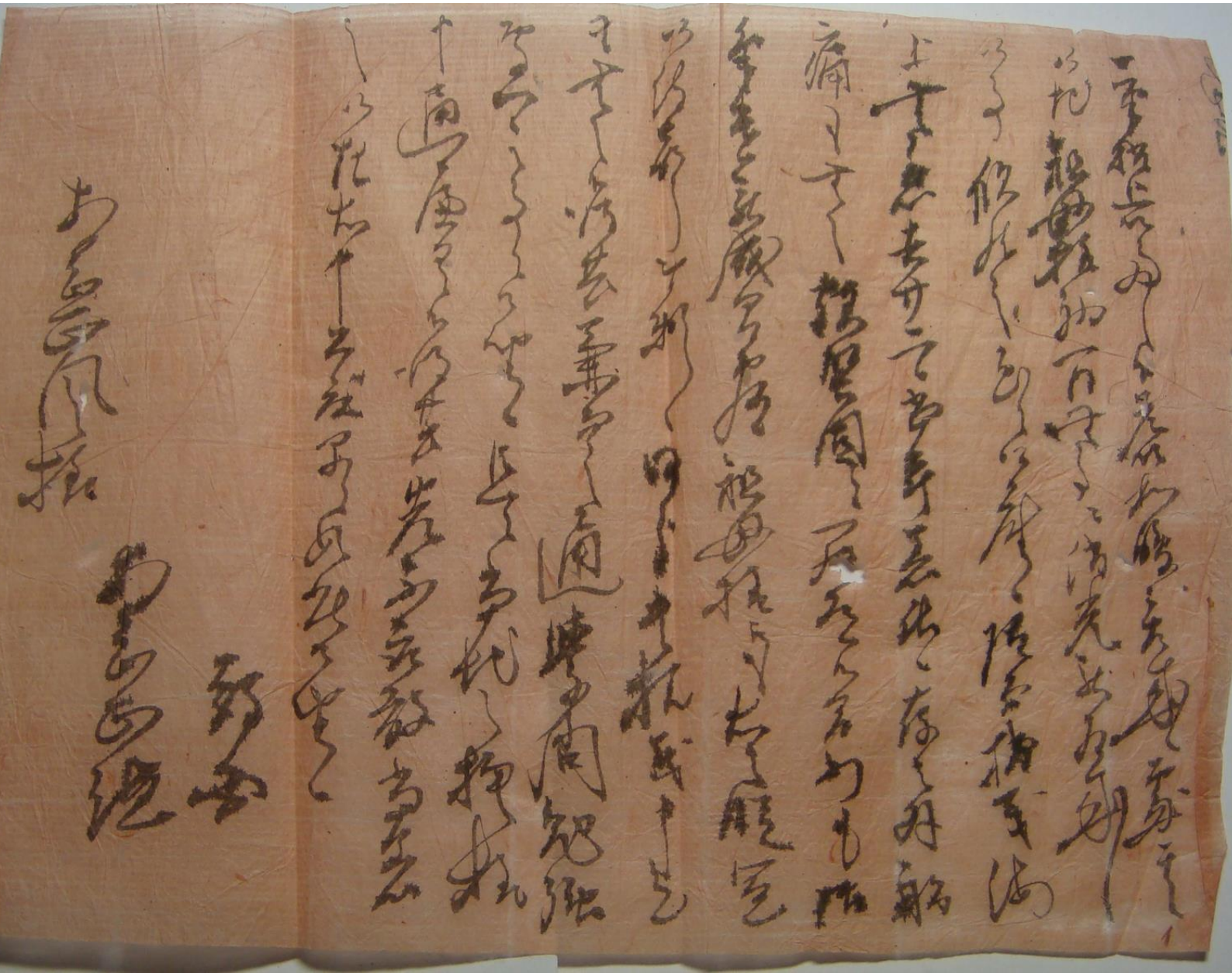
二十四日、お下家の養子となつて・・

馬二郎（正風）の女遊び、借金など問題点がフサの記録から流離譚には羅列されている。が、残されている資料を見ると明治初め、十六歳、十七歳の頃は農業経営、勉学の記録があるので、フサの記憶違いと思われる。第五十回は流離譚の記載に沿ってないが、正風について色々記載する。

文助日記に安政六巳未六月廿四日孫虎次郎出生とある。名を正風に変えたのは、権馬が正徳に変えた明治三年頃と思われる。

正風は正徳の思想の影響を受けたと思われる。時期的に富永有隣とも会っているのではないか。正徳が松山の獄に捕らわれた時には面会に行き、正徳から渡された手紙には、勉学に励めとか父親のような言葉が記載されている。捕縛が解かれた後、宿で書かれたと思われる「余下獄九閲月憤懣・・・」の書き出しの文が残っている。内容、字が整っていることから正徳の口述を正風が筆記をしたのではないか。

正風は正徳の死に立ち会い、遺体もしくは遺骨を山北に持ち帰ったのでしょう。



一筆啓上以多し候先以□□
二相来候處其御地祖母□一同
無事ニ消光被為来し御事以□
之通尓御座候□□拷義満
上無息去廿二日当年者□□
存之双痛も無之□堅固ニ罷有
候間少も□争遣被成間敷祖母
江も右之段御伝聲ヲ頼候何分
貴□義申迄も無之候得共兼而
之通學問勉強厚可被為尓御座
候且て当地之抱様申通遍具候
得共先不取散当□之御左右申
上度早々如比御座候

救國

安岡正徳

安岡正風殿

余下獄九閲月憤懣・・

余下獄九閲月憤懣与悽慨相雜不覚数
発狂或中宵推枕狂起高吟或白昼低頭
默坐而毎慨衝吻得蕪詩頗多無研管得
昏從得而從失今記其十一伏他日笑咳
云然 余獄中壮強可見矣

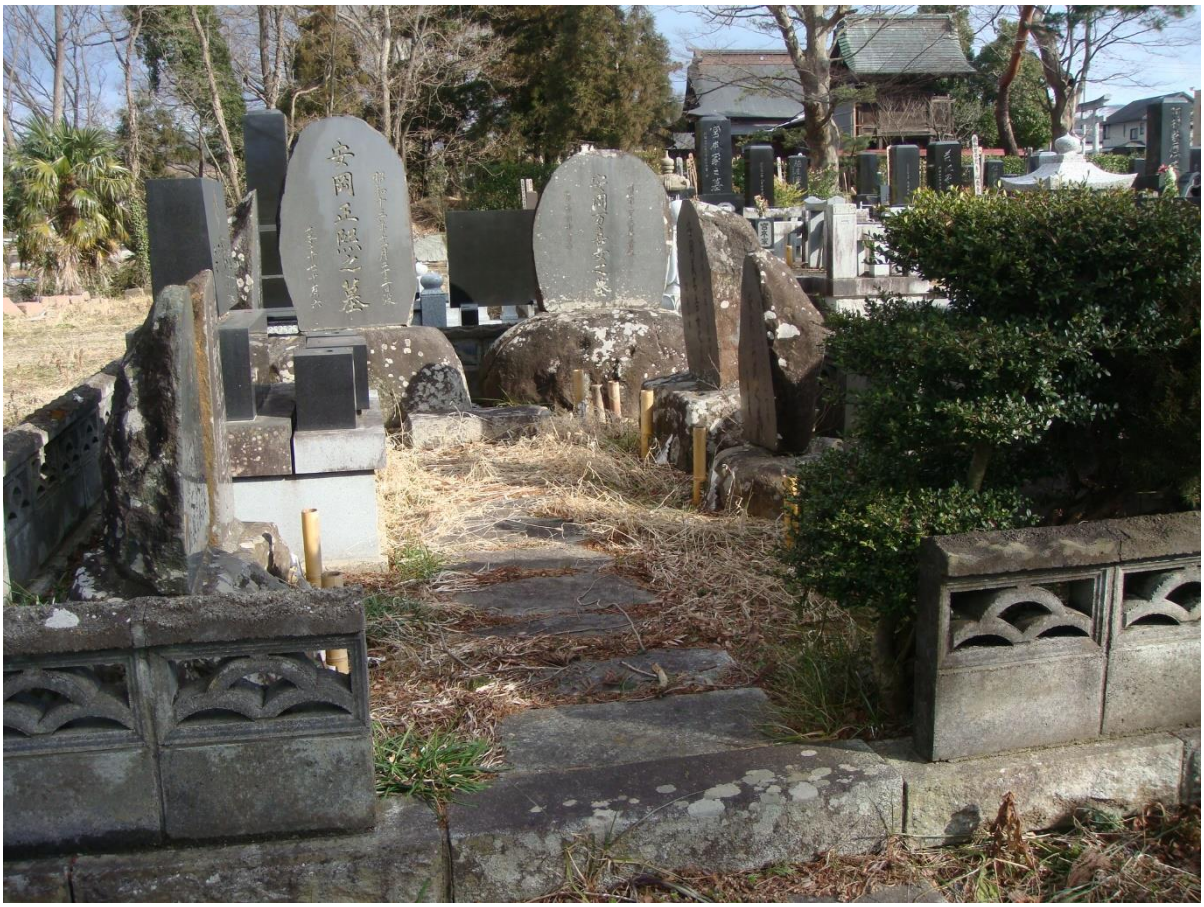
追思悲壮之

決飲発雪拂醉顔放鎗荷鎧出邊関扁舟風
雨長陔海孤馬晴岸豊筑山報国心肝窮倍
切懷家涕淚遠尤閒苦辛伏水西流去空就
囚人故国還

正徳の息子虎一郎の後見人となり、世話をした。が、プツンと世話を止め、フサと離縁し、二十六歳の頃からフサの言う女遊び、歌との結婚、離婚などがあった。

人生後半は日本精糖に勤め日本精糖が台湾に工場設置の頃台湾に渡り、その後台湾に留まり、大正七年享年六十歳で死去。遺骨は福島の本家に送られる。会社に届けた本籍地が福島だったのだろうか。梁川の墓に客死刻まれている。色々あったこの人の流離譚を聞きたい。

梁川の本家の墓



正面に正熙・万喜の墓

右列の二番目に

左の正風の墓がある。

フサは教えてくれる人がいなかったからか、漢字漢字の読み書き苦手であった。正風が居なくなり又彦が来るまでの八年間、お下の家を支え耐えたフサの力は感心します。

第五十一回の書出しは、

祖父又彦の手帖は三冊あつて、・・・

その中で明治二十五年に「我ガ養父恒之進墓碣、毀損ノ報アリ」とあります。四坊山の墓石も、大阪墓石は経年劣化の痛みはありますが、壊された形跡

はありません。自由党、国民派、官憲の暴力沙汰が書かれています。その中に

・・・山北村のお下の家の木小屋にも、大砲の台座と称する頑丈な木枠が残ってゐた。」・・・「門前に地雷火を埋め、また大砲持ち出して敵を追ひ払ふことに・・・又彦が作らせたものでもあつたらうか。

この台座を自分は米蔵に西側に投げ込まれていたのを見付けた。木砲の専門家に見て貰い、砲台座と言われているので同じ物だろう。木小屋とは絵図で道具蔵の北側に描かれている「古物　木納屋」か。こ

の木納屋がいつまであったのか不明ですが、家に砲台座の言い伝えがあったのだろう。又彦が作らせてとあるが、恒之進の作と思う。

流離譚に又彦の手帖を引用した次の記載がある。

・・三月十一日出帆ノ汽船高知丸ニ搭ジ、浦戸港出帆。船中、別ニ記スル事ナシ。

として、以後、神戸、大阪，奈良、伊賀上野から東京をまはつて、遠く仙台、松島まで遊覧・・同行者にも明治二十三年のときの・・自由党関係者の名前はないし、・・政治家たちとの邂逅や訪問の記述

も、「植木枝盛君ノ葬式」といふ一行を除いて、まったく出てこない。・・・

明治二十三年以降、又彦が政治運動から冷めていたと、流離譚は書いている。同じ頃書かれた下の書に次の添書きがあります。

明治二十四年の新生偶
兎毫を試す　窃に銭梅渓
法倣古隷の意を作る
私意を容れず、然れども

髣髴とたるを知らず
其れ万一　否益々其の
及ばざる所却妙味有り
一咲一咲　聴濤堂主人観以如何為
藜華居士　日尚

聴濤堂へ藜華居士から送られている。聴濤堂は胡鐵梅から明治二十年に又彦に送られ、又彦はこれを気に入り自分の号で使用している。送った藜華居士は誰か。この書は治二十四年に兄・別役儁（春田）から弟・又彦に送ったと推測します。この書は次の

七言絶句を参考し、作ったのだろう。

綠樹重陰蓋四鄰　りょくじゅちょういんしりんをおおう
青苔日厚自無塵　せいたいひにあつうしておのずからちりなし
科頭箕踞長松下　かとうにしてききょすちょうしょうのもと
白眼看他世上人　はくがんもてみる　たのせじょうのひと

（岩波文庫『唐詩選　下』より訳を抜粋）

緑に茂る木は深い蔭を作り、四方をおおって入る。青い苔は日ごとに厚みを増すので、地上には塵一つ無い。君は高い松の木の下で、頭はむき出し、大あぐらをかきながら世間の俗人どもを、白い眼でにら

んでいる。五言目の「自」どのように解釈するのだろうか。

兄は何を弟に言っているのだろうか。

第五十二回の書出しは、

午槃安岡正象が明治二十四、五年の頃に会津若松へ、

五十二回は福島事件をベースにその頃の状況が書かれています。福島事件を自分の知識では言及できないので、安岡正象明治二十四、五年頃に会津若松

へ出向いたのは何のため。を別観点から推測します。

又雄（正象）は元治元年六月誕生している。文助日記には誕生について何も書かれていません。この頃、覚之助は自宅蟄居状態であり、知らせることが出来なかったのか。又雄の誕生と同時に、覚之助は慶應元年六月山田の獄に捕らわれる。慶應三年九月獄から解放されるが、山北に戻らず家族と唐人町に住居、体調を整え慶應四年一月に戊辰戦争に参戦し八月戦死する。

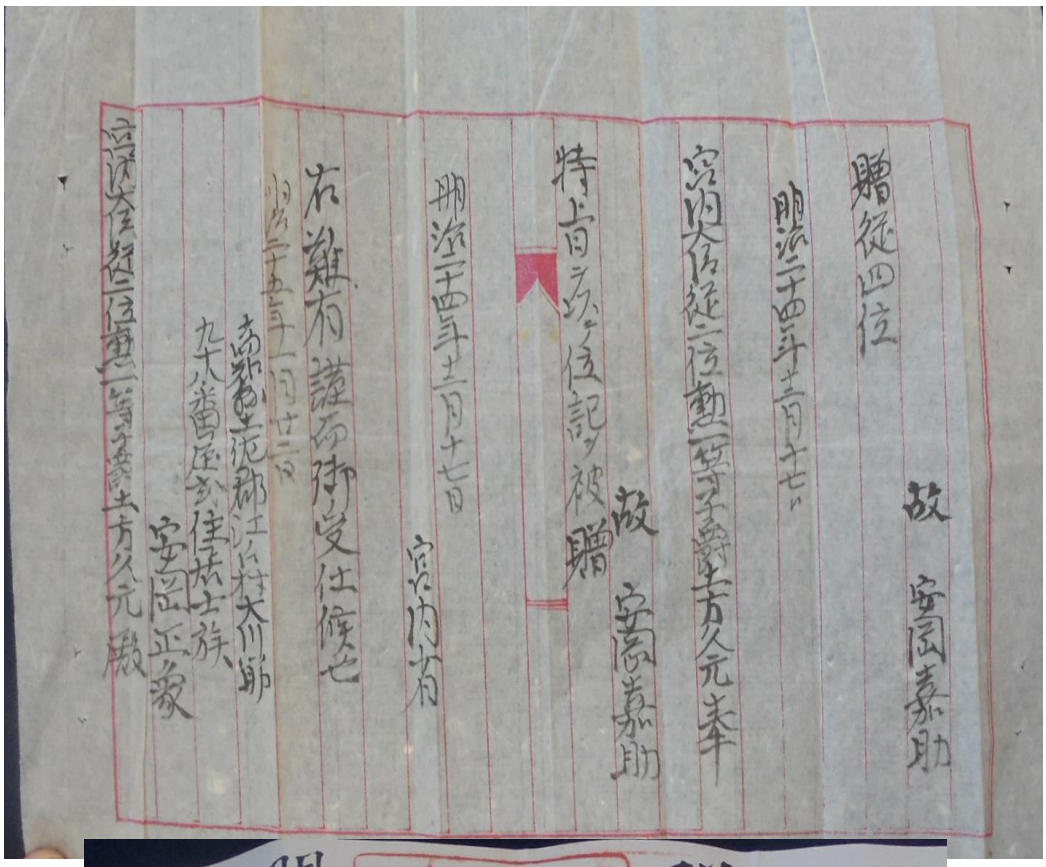
明治十五年覚之助長男平太郎松静が死亡、本家に

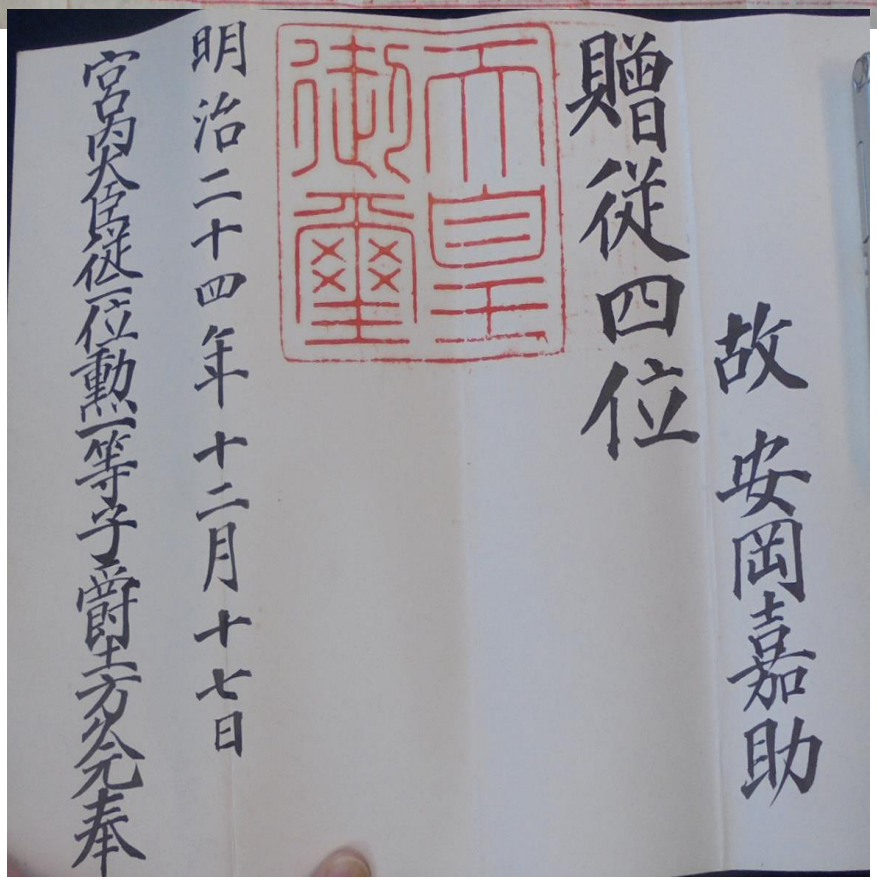
は又雄しかないが又雄は明治十五年道太郎の養子になる。この時、既に正熙の本家継承がきまっていたのか。万喜は明治二十四年福島梁川に美名吉の婿正熙に伴われ移住し、明治二十五年に死亡、万喜には覺之助の間に四人の息子は、長男平太郎は死去、寅次郎（正風）はフサと離縁し山北を離れ、三男武三郎は早世、母を見舞うのは又雄だけです。

第五十三回の書出しにも、

それにしても安岡正象が会津へ出かけた理由は何

だろう。明治二十四年十二月十七日づけで故安岡嘉助に従四位が贈られ　**贈賞は正象から義母の公文家に引き継がれました。**


贈従四位
故　安岡嘉助
明治二十四年十二月十七日
宮内大臣従二位勲一等子爵土方久元奉
特旨ニ以テ位記ヲ被贈
故　安岡嘉助
明治二十四年十二月十七日
宮内省
右難有謹而御受仕候也
明治二十五年一月廿二日
高知縣土佐郡江ノ村大川郷
九十八番屋敷住居士族
安岡正象
宮内大臣従二位勲一等子爵土方久元殿



明治四十二年、岡芝の売却のため房が対応したことが秀彦の日記に書かれています。屋敷の売却か土地の売却か、商談内容及び結果は不明です。現在、先祖の宮がある土地も他人の所有になっています。先祖の宮、墓、崩れそうな土塀、現在も使われている石積の井戸が残っています。現在、他人の土地で柑橘の畑となっています。

安岡先祖の宮（右奥）
中央岡芝に住み出した人の墓

本家が山北村をはなれていったのは、いつ頃のことか。だいたいそれはお西家の人たちが高知市内へ引き移ったのと前後して、明治十年代との中頃であろうといふ。と書かれている。お西家の人たちが移ったのは四坊山に

お西関連の墓を作り終わった明治三年頃移り住んだのでしょう。本家はその前、慶応三年、覺之助が獄から解放され、現在の高知市の唐人町住み始めた時に山北を離れています。何故か、覺之助の長男平太郎は廿代に住まいしていました。

古い戸籍に平太郎の娘安岡美名吉を筆頭にした記録に「九十八番屋敷同居同爨（＊さん　かまど）土佐郡西唐人町五十一番屋敷ヨリ二十一年二月八日同居」とある。九十八番屋敷とはお西の一族がいた家で、文助、道太郎も死去し家が空き、福島に移る

準備もあり、唐人町から移動したのだろう。
先祖祭りの記録を見ると美名吉の名で明治二十四年から欠席、道太郎は明治十九年死亡しているが、道太郎の名で明治二十四年から欠席となっています。お西に養子となった正象がいましたが、引き継いでいません。
フサと離縁した正風も明治十六年に唐人町の家を利用していた記録があります。
美名吉が結婚して福島の梁川に移ったわけを流離譚には次のように書いている。

「・・・梁川といふ町がある。そこは養蚕がさかんで、繭とりの・・・女工で眼病になる者が大勢ゐる。だから梁川で眼科医をやれば、きつと繫盛するし、感謝される」

高知で眼科医の開業の可能性はないか、次の記録がある。

高知で最初に眼科医を開業したのは町田旦龍で明治二十年頃である。その町田の経歴は次の通りです。

高知で眼科医開業初代院長町田旦龍が帯屋町に町田病院開院。現存する高知県の病院のなかで最も古い歴史を持つ。初代院長町田旦龍は安政五年十二月二十六日　日高郡能津村（日高村）で生まれる。十九歳で医術開業試験に合格した後、上京し眼科を専門に研究した。二十三歳で帰郷し、

町田眼科を開業した。当時は高知に眼科専門医は居なく、新医療器具設備や手術の実績が評判となった。

また政治業界にも感心を持ち、市議会議員、県会議員、衆議院議員と務めその後は新聞業界で土陽新聞の社長を務める。

晩年は精神病患者のための施設「精華園」（現：海辺の杜ホスピタル）を高知市長浜に設立。高知の医療業界、政治業界に大きく貢献した。　昭和二十六年五月十日　没

町田旦龍氏の経歴を見ると、高知でも眼科医は充分営業できたと思う。遠い福島まで行ったのは別の理由があるように思います。

＊精華園は小説「海辺の光景」のモデルとなった病院である。

五十四回の書出しは、

福島県伊達郡梁川町字元陣弐番地といふのが、本家人たちの新しい移転先であつた。元陣内の町名はそこが代官所の敷地

海辺の光景の海　2016 年撮影

跡だからで・・安岡正熙の医院兼住居であつた。

平成二十年その場所を訪ねた。立派な構えの家であり、正熙中心の墓が残っている。その廻りを囲むように高知からの女子

梁川の家 2008 年撮影

の墓がある。板垣が覺之助の妻万喜を訪問した記録にある。

・・・板垣の梁川来訪はまたつく突然のことであつたらしく、・・・「板垣さんが梁川に立ち寄つたのは、何よりも覚之助の未亡人さんを気遣つたためで、ほかのことではなかつた」・・・

ところでその万喜も板垣が梁川をおとずれた翌年、六十二歳で病死し、安岡の家の者としてこの土地で最初に葬られることになつた。

万喜に続いて正熙の嫁美名吉も亡くなり、後妻に

高知の島村の家から嫁を貰う。流離譚一回の章太郎の家を訪れるのが正熙の後妻の息子（次男）正光で、同行したのがこの島村の甥であろう。美名吉が亡くなり、美名吉の母真寿は高知に戻ります。その理由を流離譚は色々推測していますが、母真寿は先祖祭のことでも前面に出ず、娘美名吉に任せていました。義母、娘が亡くなった。その場面を流離譚は次のように書いている。

・・・大をばさん(*嘉助の妻)、小をばさん(*道太郎の妻)が先づ入信しのかもしれない。・・・美名吉が梁

川の家で息を引きとる間際まで讃美歌を口ずさみ、
真寿がそのあとをつけて唱和したのは、・・・その讃
美歌の、
亡ぶるこの世
くちゆく我が身
何をかたのまん・・・・
といふ言葉は、とくに臨終の床にある人の口か
ら・・・
の讃美歌を何故選んだか、実際にある讃美歌か否
か。ある方に訊くと

歌詞は少し変わっていますが、この讃美歌５３８番で間違いないと思います。この歌の１番は「過ぎゆくこの世　朽ちゆくわが身　何をかたのまん　十字架にすがる」となっています。

出だしの「亡ぶるこの世」が「過ぎゆくこの世」に変わっていますが、これは昭和29年の発行の讃美歌ですので、その時に変わったのだと思います。

作詞　作曲は 1869-1870 年とありますので、明治のはじめに宣教師が伝えた新しい讃美歌だったと思います。高知で入信し皆で新しい讃美歌を覚えたとして、

この讃美歌を章太郎は流離譚で流したのだろう。
秀彦もキリスト教に興味があったようで、購入した
レコードに次の讃美歌があります。
きよき岸邊　第五百六十五番　東京聖歌隊
血しほしたたる　第百二十五番　東京聖歌隊
前の歌は
きよき岸辺に　やがて着きて
天つ御国に　ついに昇らん
その日数えて　玉の御門に
友も親族(うから)も

われを待つらんやがて会いなん
愛(め)でにし者と
やがて会いなん
後半の歌は
「血しおしたたる」(ちしおしたたる、独語:O Haupt voll Blut und Wunden(おお、血と涙にまみれた御頭よ!))はドイツの讃美歌。イエス・キリストの受難の讃美歌であり、英米でも知られ、受難週や聖餐式、特に受難日(聖金曜日)の讃美歌である。

秀彦は古い主屋でこれを聴いてどんな思いをしたのだろうか。どんな思いでこのレコードを購入し聴いたのだろうか。

道具蔵の裏を解体前に掘っていたら天使像が出て来た。誰が何故埋めたのだろうか。

第五十五回の書出しは、

山北四坊山の墓地に、安岡文助妻の墓があるが文助その人の墓石が見当たらない・・・

伯父たち小高坂山を探索し文助の墓を見付けた。参拝に行ったが周囲の墓は草に埋もれていた。四坊山の広々とした墓地に比べると狭く、どこに骨を埋葬したのか。もしかして散骨したんだろうか。狭い

場所に

道太郎の墓から、右に順に

安岡道太郎　妻・・・

安岡正象・・・

公文郁・・・

公文梶・・・

と、いづれも小さい墓が

四基、・・・その一番端に、中

途から上が欠けて「嘉助

妻」としか読めない墓が危

げに立つてゐる。・・・その墓石は四つ五つに割れて下の段に散らばつてゐたのを、従兄の細君が拾ひ集めて、何かとまとめ上げたものだといふ。・・・離れた場所に小さい墓石が集まっている。

安岡真寿・・・
安岡松静・・・
安岡文輔・・・
安岡富士・・・
安岡有子・・・

植木枝盛の大きな自然石の墓が下の広場にポツンと立って居る。小さく、崩れそうな墓石でも一族で集った方がいいかな、どうかな。

文輔は四坊山に皆をまとめて埋葬することを計画していた。明治十四年文輔歿、その頃山北のお上は正徳の死、お下は又彦が養子に来る前で主不在のような状態、遺骨の持込みを遠慮したのだろうか。

流離譚の最後に安岡正熙から秀彦へ送られてきた

兩烈士覺之助・嘉助の碑

建設の感謝の手紙が掲載されています。

贈從四位安岡嘉助正定
贈正五位安岡覺之助正義 兩君碑

贈賞の位順か、右から弟、兄の順に並べられています。

正熙の息子の訪問で流離譚話は始まり、回って故郷に戻って来ています。

流離譚シリーズはこれで終わりです。

令和五年九月